

パンを持って帰れる日

山本里美 (83歳)

投稿者・中山真須美(大津市)

ので、宿屋で雑魚寝のようにして一泊し、次の朝一番の汽車で大船渡に戻りました。戻ると駅の近くに米を買ってくれる所があり、船に乗る人たちが、そこから米を買っていくのです。

ところが、改札の所で、ときには警察官が荷物を検閲することがあって、必死の米を取り上げられてしまうのです。そんなとき、「友ちゃんはいいなあ」と言われることがありました。担任の先生が、汽車通勤の先生方に声を掛けて、手拭いで袋を作ってください、私はそれに米を小分けしておくのと、途中の高田から乗車してくる先生方が、一袋ずつ受け取って、カバンの底にしのばせてくれたのです。改札をぬけてから、先生方が「早く学校へこいよ、友子！」とポンポンと米袋を私のリュックにもどしてくれました。お蔭で、私の米は無事。今思えば顔が赤くなるほどですが、当時は恥ずかしいと思

う余裕もなかったのです。

出かけない日には、塩作りの作業がありました。海の水を炊き上げる薪が大量に必要で、朝早くや下校後山に入って、薪を集めてきました。塩炊きは夜一晩中続き、交代で夜の見張り番に出ることもありました。

裕福だった暮らしが、一九四四(昭和十九)年九月の父の死、昭和二十年の空襲での自宅の焼失、終戦、疎開と、二変も三変もする中、よくぞ切り抜けてきたと思うばかりです。周りの方々の助け、若さ、そして幼子を残して逝った父の無念が、私を奮い立たせました。ただ思う存分、学校に行つて勉強しなかった、そのことは今でも心の奥でチクチクしています。

小野寺友子(おののら・ともこ)さん。当時12歳、東京浅草から現在の岩手県大船渡市に疎開。文章は、小野寺さんの長女・赤松世(あかまつ・せい)さんが清書した。

た。そこで高学年の人達は自転車部隊を作り、山から薪を運んできた。下の学年の僕達は、運動場にあつた木の根元に、運動会用の綱をかけ、先生の号令で「わっしょいわっしょい」と掛け声をかけて、何本も引き抜いた。

時たまだが、給食のパンには、全く食べられないような物が混ざっていた。多分数合わせのためだろう。およそパンなどと言えない、

真つ黒な芋の焦げたような物だった。それでもその日の人数分しかもらえないので、誰かが当たる。その不幸な者の中に、僕も一度選ばれた。その時のみじめな情けない気持ちには忘れることができない。不平など一切許されない時代だった。

特別な配給だったパンは、食べ残したり持ち帰ったりすることは厳しく禁じられていた。ある時、

下の妹が病気でパンをねだり、困った母から少し持って帰るよう頼まれた。無理だと思ったが、妹のために3分の1ばかり残り、隣に気づかれぬよう、そうっと机に忍ばせて本で隠した。しかし午後、いきなり机の中を調べられ、僕その他2名が見つかり詰問され

1944(昭和19)年4月、僕が国民学校4年生になった時に、学校給食が始まった。大豆のカス、トウモロコシ、高粱、さつまいもなどを混ぜたご飯がその頃の食べ物だった。それさえもともに食べられない家も多く、朝礼の時、運動場で次々と倒れる人が出た。まったく信じられない様子で、ふあ

と眠るように倒れていき、すばやく見つけた先生が駆け寄り、抱きかかえて医務室へ連れて行く。栄養失調だった。立派な軍国少年を育てなければならぬ国としては一大事、とい

た。僕は妹のことなど口に出せず、咄嗟に「腹が痛かったのです」と答えた。

パンは1階の空き地で飼っていた豚の餌になった。自分が悪いとはいえ、妹の期待に応えられなかったことや、密告者がいたかもしれないと思うと悔しかった。

しかし、そんな貴重なパンを堂々と持って帰れる日もあった。空襲警報が鳴った時だ。

11月の東京空襲以来、しばしば警報が鳴るようになっていたが、僕達はむしろ喜んで待っていた。最初の頃はただ鳴るだけで、直ちに家へ帰れたのだ。午前中に警報が出て解除になればまた登校だが、午後ならそのまま自宅待機。特に嬉しかったのは、昼に出る警報だ。それもパンを配り終わった直後が最高だった。持ち出し禁止のパンを家でゆつくり味わった後、遊ぶことができる。「空襲さまさま」だった。

うことで、給食は始められた。当時の僕にそんなことは分からなかったが、家で買ってもらったことなどなかったパンは、大きな喜びだった。

初めの頃には味噌汁がついた。味噌汁を作るための場所として、職員室の隣の湯沸し場が使われた。以前は、小使いさんが大きな釜で茶を沸かしてくれていた場所だが、そこにパンも置かれるようになった。

僕達は数名ずつ組になってお屋に受け取りに行った。味噌汁を作るためには、多くの薪も必要だった。

しかし、それも長くは続かなかつた。僕が5年生になった1945年4月から、昼夜を問わず絶えて勉強できる雰囲気ではなくなつた。サイレンが鳴ると、いつでも授業を放り出して帰らなければならぬ。初めのうちこそ町ごとにとまどって帰っていたが、いつの間にか我先にと走り去っていた。

そのうちサイレンは、僕達を休ませず、眠らせず、不安に陥れて追い詰めた。警報の度に防空壕へ逃げるので、ご飯も喉を通らず、夜は服を着たまま畳の上でごろ寝となり、睡眠不足でみんな疲れ果てていた。

戦争は何もかも変えてしまった。思う存分声を上げて駆け回った運動場は、食糧増産のため開墾され、芋畑になった。楽しい行事だった遠足は行軍、運動会は鍛錬会となり、やがてそれすらなくなった。授業の代わりに、防空壕を掘り、



戦時下をたくましく生きた、少年時代の山本さん。